

日本 SPF 豚 物 語

— 畜産目的に向って「官」との攻防 —

北海道大学獣医学部 波 岡 茂 郎

驚くべき認識の落差

まず私どもが SPF 豚の畜産目的への利用を考えていた昭和 40 年頃における自信ある養豚家との平均的会話の内容を紹介したい。「あなたの子供が結核や赤痢、また慢性の伝染病にかかっていない場合どう考えますか」「まことに有難い話で、我が子の健康を喜びますよ」「あなたの飼っている豚が根治のむずかしいいろいろの感染病にかかっていて困りませんか」「とんでもない、いろいろの病気にかかることによってたくましく、雑草のごとく強くなりますよ。病気にかかっていない豚など抵抗力がなく、却って弱くてだめですよ。」これは当時の SPF 豚に対する代表的養豚家の概念でした。

当時農水省では豚の 10 年間における改良目標を示しておりましたが、そのひとつ飼料要求率では、FC3.5 を 10 年かかって 0.2 改善して 3.2 (ランドレースの場合) にするとあります。この時すでに私どもはセコンダリー SPF 豚で FC2.8, 90 kg 到達日齢 150 日という成績を得ていました。

私どもが豚の SPF 化を始めた目的は、前号でも述べたように、ひとつは豚の感染症の研究のための実験動物として、いまひとつは畜産目的のために応用することでした。そして後者の目的のためには官民の理解と援助なくしては実行が不可能と考えたのです。「官」は主として、農水省技術会議、畜産局家畜生産課(当時改良課)、衛生課、畜産試験場などで、また同時に各県の畜産試

験場との協力も必要と思われました。一方、その頃すでにアミノ飼料(株)〈現在の伊藤忠飼料〉、住商飼料畜産(株)、サイボク(株)などが畜産目的の SPF 豚試行に着手し私どもとの協力体制にありました。さらに、いち早く千葉県が具体化の検討に入っていました。

さて、以下に私どもが SPF 豚による変換計画に関して「官」と交渉してきた経緯を当時の議事録から抜粋しておきたいと思います。これは延々と砂を噛むような内容であり、「官」における進展のない、堂々めぐりで、責任の所在不明の議論の延長に終始した記録です。辛抱して読んで頂ければ幸いです。

◎昭和 42 年 7 月 26 日：技術会議、渋谷調査官召集〔出席者〕技術会議、改良課、畜産試験場、家畜衛生試験場(柴田、波岡)

〔結論〕柴田部長談：農水省における SPF 豚による集団変換の中心は改良課であるので、同課は傘下の種豚登録協会の主催で研究会を持ちたい意向と理解した。しかし私の見るところ、本庁では未だ SPF 豚の必要性に対しての疑問をもっており、取り上げる時期でないと考えている。これは本庁の勉強不足もあるが、たとえば AR, SEP 罹患豚の飼料要求率は健康豚に比べて大差はないという意見もうけたまわった。結論として官民で SPF 豚変換計画に興味をもつ有志の討論会を招集することに同意する。時期は 9 月上～中旬。

◎昭和42年9月23日：SPF豚討論会（出席者約80名）於種豚登録協会

* 牧田理事の挨拶

* 波岡：SPF豚およびSPF豚農場に関する具体的な説明。

* 牧田理事：SPF豚農場に関する具体的な内容とその危惧について討論して欲しい。

* 福田理事：何らかの型で早くデータを出してほしい。

* 栗原全畜農場長：SPF豚のパイロットファームはできるだけ早く実現したい。

* 益子（千葉県）：県としてSPF種豚を年間250頭規模でスタートする計画である。

* 有吉（アミノ飼料）：当社としては数年前からSPF豚をとりあげて研究している。米国ではFC4.5～6.0、日本では3.5が良い方とされているが平均4.0である。飼料が人の食糧と共食するので近未来に世界的食糧不足を救うためにもFCを低下させることは重要課題である。現在豚では20～30%の飼料のムダ喰いがあり、これの対策は急務である。SPF化もその1方法である。しかし、これは大事業で本来国が行うべきだが、国はデータがないと予算化できないという。一方、データを出すためには予算が必要と議論は堂々めぐりしている。しかし、何らかの形でモデル的な企画を実行して世論をとりまとめ国が動くよう進言したい。

* 吉岡（改良課）：聞いていると国でSPF化をやれという意見が多く、疑問があまり出ていないようだ。そこで質問したい。1) 病気対策はSPF化のみに頼らなければならないのか、ニワトリで畜産目的のSPF化ができないのはなぜか。2) ネズミ、スズメをどうするか、50mの距離でよいの

か。3) 「養豚だより」誌で米国ではSPF豚は下火になっているというが、米国でのこの現状をどうみるか。

* 鮎沢（山梨県種豚家）：養豚家の立場からスイスでSPF農場を見学したが、すでに実用化の段階で想像以上に進展していた。SPF化は安易ではないが、日本でも実用化にふみきれると感じた。

* 牧田：かりにSPF化を国や県あるいは民間協力でを行う場合、何か提案があれば柴田部長に聞きたい。

* 柴田（家衛試）：SPF化には現在慎重論、具体論、試行論などがある。何はともあれデータを早く出したい。それも大規模な農場での成績が必要である。その意味で、もし可能ならSPF豚研究会を設立しここで具体策を検討したい。

* 栗原：養豚研究会（現在学会）内の下部組織でもよいから、とにかくSPF化試行の研究集団を作ることを提案する。

* 鈴木（章）（養覽堂）：まず研究会を作る。その後社団法人に移行させる。協会が「SPF」を規定し馬喰（バクロ）的ブリーダーをシャットアウトする。このように豚に病気の多い状態は異常である。

なおこの時点（昭和42年10月）では以下の官民の場所がSPF豚の肥育成績を検討する準備を進めております。

千葉畜産研究センター、新潟畜試、岡山酪農試験場、畜連農場、アミノ飼料、住商飼料畜産、埼玉牧場（筆者註）。

◎昭和43年5月24日

SPF豚協議会発起人会の検討（註）：1) 世話人代表決定、2) 臨時事務局、3) 世話人会の業務（イ）協議会、認定委員会の役員候補の交渉、

(ロ)会則に関する意見とりまとめと会則案作成
 (ハ)協議会発足の準備(註:本案実行は改良課の恣意によってこの時点では不可能となる)

◎昭和43年12月10日:技術会議渋谷調査官との打ち合わせ。〔家畜衛試側〕柴田,野口,福永,吉村,波岡

*渋谷(技術会議):SPF化に関しては,衛生課,改良課,経営課,流通飼料課,技術会議で検討し農水省としての態度を決定する。畜産局でも内部で検討中である。

*信藤(衛生課長):SPF化は衛生対策のひとつであるが,研究費を競馬会から貰うとすると経営にもタッチするので衛生対策だけの問題から逸脱する。もし可能ならプライマリーSPF豚生産も民間で行うべきだ。家畜衛試の協力は技術の講習に止める。現在どの程度にSPF豚が広がっているのか。

*柴田(家衛試):1)当場で生産されたSPF豚の使用目的は80%が実験用で20%が畜産目的としての協同研究。2)集団変換のデータといっても2~3頭の実験段階のものでは役に立たない。大規模養豚で始めて提出可能な資料となる。またSPF用飼料の開発も伴うので民間との協同研究でなければならない。3)そこへ民間の希望者がでてきた。さらに私どもは内輪な研究会をすでに発足している。4)一方では上部外資導入型の動き^(註)があるので,ある程度オープンにして前進すべきだ。(註:総合商社によるハイブリッド豚の導入を指す)

*渋谷:畜産目的というからには経済,飼養管理の諸問題が加わってくるので衛生対策というだけのSPF化にどれだけのメリットがあるのか。しかもなしくずし的に民間との協力を始めているよ

うだが,これに入る前にどこでどの程度公認されてやってきたのか。家畜衛試の施設を民間にオープンにする場合法的基準によって農水省の許可を必要とする。その許可のためにはデータが要求される。すなわち,1)技術的データ,2)電気代なども含めた家畜衛試負担分の原価計算,3)SPF化でなければこれこれの病気が排除できないという実験的裏付け。以上を技術会議と丸尾調査官に提出せよ。

◎昭和43年12月12日:技術会議会議室

渋谷(調査官),高橋(畜試),丸尾(調査官)家畜衛試(柴田,福永,波岡),改良課長,吉岡(改良課),松崎(茨城支場長),信藤,河内(衛生課),流通飼料課,経営課。

*渋谷(技術会議):SPF豚に関して栗原,笹崎氏らが研究会を作れと言っているようである。彼等はSPF化について一段と飛躍させたいと承っている。その背景にはきわめてスケールの大きなものを考えているようだ,これを見きわめずに家畜衛試が協力するのは如何なものか。こうなると畜産局で考える問題になる。家畜衛試では数年来SPF化の技術開発を行っているようだが,全国的に影響のある畜産目的の実施にふみ込もうとしている。これには検定の問題もあるので我々としては思想統一せざるを得ない。

*柴田(家衛試):SPF豚の畜産目的については国際的に1953年来の歴史があり,すでにSPF豚の概念は固まっている。SPF豚の集団変換に関しては行政の側で希望を出しそれに即応して家畜衛試が動くのがスジである。すでに我々は県,民間とともに研究会^(註)を開いた一方,多方面からSPF豚供給をオープンにしるとの声もある。(註:昭和42年9月23日登録協会における討論

会のこと)

*吉岡(改良課):あの討論会を種豚登録協会でやったのは改良課が主催したものではない。

*渋谷:昨年技術会議で畜産目的 SPF 豚の特別研究に関して予算化したが発現しなかった。データが不完全だということだ。SPF 豚を否定する前にまず正確なデータを出す必要がある。これをどこで行うかが問題である。また外国のデータも参考にすべきだ。

*柴田:わが国へのランドレースの導入に先立ち、「官」は事前に完全なデータを出して輸入を許可したのか?これに対し SPF 豚の場合一貫して完全なデータと繰返すが、「官」の考える完全なデータとは具体的に何か。このような態度の理由を聞きたい。

*松崎(白河種畜,茨城支場):技術会議がランドレースの二の舞(註)をやれというなら、SPF 豚もその考え方でやればよい。(註:ランドレース導入に際し、「官」の判断が甘かったため、民間主導型になり結果的に AR や SEP が全国に蔓延しひどい被害を蒙った。あまつさえ LW のような雑種種豚が増加し登録制度が混乱したとの説明あり)

*渋谷:SPF 豚の検討を技術会議がとり上げるにしても3~4年はかかる。それまで民間に待てとはいえない。我々としては SPF 豚もランドレースの二の舞になると言わざるを得ない(註)。(註:民間で勝手にやれ、「官」は責任をもたない)

*大久保(改良課長):英国でシャロレーを輸入する目的で、まず特定の民間に飼育グループを組織させ、そこから得られたデータの評価によって輸入オープンにふみきった。SPF 豚の場合もその

目的に沿った衛生面、防疫に対する考え方を統一すべきだ。

*高橋(畜試):栄養学研究の面からも、また FC や肉質改善の点で SPF 化は一つの手段と考えられる。品種改良、飼料効率に SPF 豚をうまく噛み合わせるような研究面を考えたい。

*丸尾(畜政課):畜産局としては SPF 豚に関して公式な論議はしていない。民間が SPF 化に対してリスクを負ってやることに歯止めはできない。ただ行政としては SPF 豚をどういう位置付けにして行くかを問題にすべきである。

*信藤(衛生課):SPF 豚は実験動物としてぜひ必要で、これを直ちに入手できるようにしたい。畜産目的で新しい養豚団地が出来た場合 SPF 豚のみを導入すれば十分 SPF 状態は維持できると思う。しかし SPF 豚が民間リスクで開発された場合 SPF 状態のスタンダードを決めるべきである。それも国際的な標準で。行政でもっとも重要なことは SPF 豚のスタンダード作りである。

*渋谷:現在はスタンダードを作ってもよい段階かどうか疑わしい。それに先んずるデータの整備が必要である。

*信藤:スタンダードのためのデータは特に必要ない。国際的に通用するものを表示すればよい。これをしないとマガイモノが早速出てくる。

*渋谷:しかしデータが出るまで家畜試としては SPF 豚集団変換について YES, NO は言えない。現在畜産局としては判断材料がないから試験研究の側でデータを出す。窓口担当は衛生課ではいかがか。(註:技術会議は常にデータを口にしつつ上述のようなきわめて矛盾したことの繰返して、家畜術試における畜産目的の SPF 化を牽制し、かつ「官」としても何らの方向性も打ち出さない

ことに終始。)

◎昭和43年7月25日

衛生課への意見書(家畜試, 柴田, 波岡連名)

1) 日本の畜産界には豚のSPF化という家畜衛生に立脚した新技術の導入を体質的に避けたい気運がある。しかし、諸般の事情からこれを前向きかつ積極的に実行する必要がある。

2) 現在までにSPF化に関し家畜衛生試が民間と協同研究を行ってきたことについて、技術会議はこれを法的に問題があるとしてきた。しかしこのような形で民間と協力してきたからこそ民間独自で独走することが避けられ、したがって混乱もなかった。この際家畜衛生試が、いわばスタンダードを規定し、技術的コントロールの役割を担ったといえよう。

3) 畜産局ではSPF化に踏みきるためにはデータが必要であると再三にわたって述べ、これから一歩も出る気配はない。しかし、このデータなるものの具体的内容は何を指すのかの明示がない。ところで、今かりにわが国にSEPやARが存在せず、かつ多頭養豚でFCが3.0以下であるにもかかわらずSPF化技術導入を行おうとする場合、SPF化について優位性のデータが必要であろう。しかし現在SPF化に踏みきろうとする場合、わが国にSEPやARがどれ程侵蝕し、年々多頭飼育でどれほどFCが悪化しているかのデータが要求されるべきで、そのデータであればすでに多くのものがある。

4) 「官」では100%民間リスクでSPF化事業を行う場合には自由にやってよいとの意見であるが、こうなるとSPF状態の検定、スタンダードなどが客観的に行われ難く、少なくともSPFという用語は畜産用語として悪用されることは必至

である。一方、「官」では民間のSPF化事業について競馬会や農林中金の使用は認められないとしているが、これらを使用する場合行政上の査定や意見が関与するから、却って種々行政の目がとどき好都合ではなかろうか。

このように、SPF化について100%民間リスクなら自由ということは、それが混乱を来たした場合の收拾に行政が介入することが困難になる。しかもなお、100%民間リスクで自由にとのことであれば、なおさら行政面で示すスタンダードが早期に必要とされ、このことは遅らせるわけにはゆかない。

以上は部外者に初めて公開する昭和42~43年にかけての貴重な資料の抜粋です。要するに「官」は畜産目的のSPF化に関するあらゆる動きを牽制し、かつそのための検討予算など望むべくもありませんでした。

しかし、この時期すでに千葉県、岡山県、新潟県など、また民間ではアミノ飼料(株)、住商飼料畜産(株)、サイボク(株)がSPF豚による集団変換計画の試行を家畜衛生試と協力して行っております。そのうち千葉県では、昭和44年12月に千葉県畜産センター養豚試験場にプライマリーSPF豚生産施設を完成させ、これは畜産目的のための当該施設としてはわが国で最初のものとなりました。ついで同試験場は民間との協力で富里村に“SPF豚モデル養豚場”(責任者 佐々木三郎氏)を設置しましたが、これを実現した当時の菅野保場長と関係各位の努力は並々ならぬものがあったことは記憶に新しいところです。さらに特記すべきは全農飼料畜産中央研究所(筑波)でもプライマリーSPF豚生産施設がもうけられ畜産目的のSPF豚

生産実験が開始されるに至ったことです。一方の民間における動向については後述したいと思います。丁度この頃、科学技術庁が実験動物の SPF 化およびノトバイオート化についてかなり高額の研究費を支出し、私どもも豚の SPF 化に関して分担いたしました。この時プライマリー SPF 豚輸送車が試作され、これによって SPF 豚が安全に輸送できたわけです。

日本SPF豚協会・SPF豚研究会・SPF Swine 誌

いままで述べてきたように、昭和42年から43年にかけて私どもは家畜衛試に設置された施設でプライマリー SPF 豚を作製しこれを各方面に輸送するとともに、「官」との対話を頻回積み重ねて参りました。そして実験動物がそうであったように、SPF 豚に関する考え方は科学的根拠に裏付けられ理論的に正しいという確信がありました。したがって、畜産目的の SPF 豚に関する実験・研究成績をなるべく多く、かつ詳細に公表しようということになり、そのためには核となる場が必要だという結論に達しました。そのために、「官」で認めないなら任意の団体からなる協会を設立し、ここで雑誌を発行しかつ研究会を持つということになりました。これを踏まえ、昭和44年10月18日に事実上の協会設立の旗あげをし、初代の会長にはアミノ飼料中央研究所の有吉修二郎所長が選ばれました。この時の議題はつぎのとおりです。1) 日本 SPF 豚協会と称し任意団体とする。2) SPF 豚作出使用、取引は各委員の責任において行う。3) SPF 豚の PR、雑誌の発行、研究会の開催。4) 官庁との接触

ついて、昭和45年8月8日には SPF Swine の

編集会議を持ち、同年近代出版から1巻1号が発行されました。一方、昭和46年9月20日には千葉県養豚試験場で SPF 豚研究会が開催され、これには北海道から九州まで主として県の畜産試験場、家畜保健衛生所で SPF 豚に興味をもつ人々が参加しました。

日本 SPF 豚協会の総会は年1回開かれましたが昭和46年にはその議題も多くなり、事前に理事会が開催されるようになりました。その内容は、1) SPF 豚の定義、2) SPF 豚の範囲、3) 経済基盤の確立(旅費、宣伝、回転資金、事務局費)、4) SPF 豚の PR、5) 協会事業内容の拡大、6) 法人化の問題、7) SPF 豚配布の際の条件、8) 検定、認定をめぐる諸問題、9) データの報告促進、10) 豚籍簿など。

なお協会長はその後有吉氏から住商飼料畜産(株)の本田英三社長に引き継がれましたが、氏の SPF 豚事業に関する熱意と努力がその後のわが国の SPF 化に大きく寄与したことは特記すべきことです。ちなみに、昭和45年現在わが国における SPF 種豚数は2,500頭で、そのうちわけは次の通りです、アミノ(1000)、住商(300)、埼牧(800)、千葉県(150)、新潟県(50)、岡山県(50)。

SPF Swine は昭和56年6月1日に9巻1号の発行をもって休刊となりましたが、いわゆる「官」の要求するデータを収録して余りある収穫が得られ、わが国における畜産目的の SPF 化のうえに大きな責務を果たしたと言えましょう。現在、衣の装いも新たに、All About Swine が協会(現会長赤池洋二氏)の下部機関 SPF 豚研究会(会長柏崎守氏)から発行されていることはまことに喜ばしい次第であります。

海外の動きと再びわが国のその後

わが国で SPF 豚による集団変換を試みている時期にヨーロッパおよび米国の主としてネブラスカではすでに産業としての SPF 豚生産が定着しそれが拡大しつつありました。ヨーロッパでは特にデンマークのそれが著しく、ついでドイツ、スイスで実行されています。筆者は昭和 50 年に「デンマークにおける SPF 豚生産について」と題する総説を SPF Swine (Vol. 6, 27~31, 1975) に発表しております。それによると、デンマークでは養豚協会やベーコン協会が協力しあい、これに国の獣医師も加わって包括的に SPF 化を行っており、この状況はわが国の対応とは比べものにならないぐらい進んでいました。当時 (1974) の統計的予測では 1994 年頃にはデンマークの豚 (常時頭数 950 万頭) の 100% が SPF 化されるというものです (ちなみに 1992 年現在で 60% が SPF 化されている)。さらに、1980 年 (昭和 55 年) コペンハーゲンにおいて第 6 回 IPVS (International Pig Veterinary Society ; 国際豚病会議) が開催されましたが、ここでは SPF 豚による集団変換のセッションが独立して設けられ、各国のこれに関する発表が活発に行われております (波岡, 第 6 回世界豚病会議に関する報告, 日本獣医師会誌, 33, 499~502, 1980)。このセッションの結論として SPF 化の技術は容易に修得しうるため、集団変換による疾病制御はますます国際化するであろうと結論づけています。本セッションの座長がネブラスカ大学の Dr. Underdahl であったことも印象的でした。

やや前にさかのぼって、昭和 44 年 10 月 22 日に畜産局の畜政課 (丸尾), 改良課 (吉岡), 衛生課 (緒方), 畜産試験場 (姫野) 招集による県単

位 SPF 豚会議なるものが招集されました。参加者は上記の他に、千葉県 (菅野, 高橋), 岡山県 (森谷), 新潟県 (山村), 家畜衛試 (柴田, 猪, 藤倉, 波岡) です。内容は略しますが、「官」はこれらの県にゲタをあずけ、そこで畜産目的の SPF 化に関するデータをある程度参考にしたいと考えたのです。この時の取りきめに従って後日再び会議を開きたいという意向が示されました。そしてその会議は 4 年後に行われましたが重要な会議ですから、再び議事録を引用しておきたいと思えます。

◎昭和 48 年 12 月 10 日

技術会議：姫野管理官, 河野副管理官

千葉県 (菅野, 小山, 宮原), 岡山県 (森谷), 群馬県 (大江他 2 名)

家畜衛試：柴田, 須藤, 志村, 福永, 下総, 波岡

畜試：松垣, 高橋, 技連室長

衛生課：信藤, 緒方

改良課：吉岡

* 姫野 (技術会議) : 44 年に申し合わせがあった (前記昭和 44 年 10 月 22 日の会議を指す)。その後各所で SPF 化の検討がなされた。本日はそれらの研究内容について意見交換し行政へ伝達する。SPF 豚に対する評価の相違からいろいろの意見を承っている。これを本日検討しテクニカルアセスメントとしてその取扱いを協議したい。

1) 千葉県の研究成果：昭和 44 年から着手しその考えかたは (1) SPF 豚の最終目的は実用化である。県内の自立養豚家による SPF 養豚団地、行政で SPF 専門係員を置き推進している。(2) プライマリー SPF 豚の作出から一貫して行っている。子宮切断に抵抗があるので帝王切開によっている。

来年度までに技術の確立は終了すると考える。(3)千葉県行政側からの説明：46年度にモデル農場設置，47年度から中核農場→自立経営農家群20戸の建設。米国およびデンマークでは育種改良についてはSPF豚を使用している。

2) 岡山県：AR清浄化のためにSPF化試験を開始，47年SPF豚振興対策協議会設置。(1)もっと簡易な管理規制が望まれる。清浄豚の定義を確立して日本的なスタンダードを作る。試験段階のSPFと普及段階のそれについて議論してほしい。(2)現在わが県のSPF豚と体成績は悪い。血液更新が必要。(3)一般豚との隔離で市場性に乏しい。これを改善すべきである。(4)飼料および給与基準。(5)検定法の日常化の確立。(6)変換に際して経営が中断するが，これの経済的補助。

3) 群馬県：清浄化方式（早期離乳法）を試行している。清浄豚とはARおよびSEP不在のものと考えている。

* 姫野：SPF豚生産技術はすでに確立したと考える。

* 菅野：(千葉県養豚試)：プライマリー豚作出についてはそうである。

* 松垣(畜試)：自然分娩によって子豚を清浄化する方法を考えてはどうか。我々は超早期離乳器を考案しており，1組(12頭用)で100万円である。

* 姫野：SPF豚研究の今後の問題点，たとえば対象となる疾病，検定法，すなわち不特定多数におけるインテグレーション，変換となると，その検定法やシステムはどのようになるのか。一方畜産局としては現段階でSPF豚についてどう考えているか，またどのような配慮を望むか。

* 吉岡(改良課)：SPF豚の行政からの対応は衛生課，経営課も含まれる。しかし改良課としては

わが国の養豚の実状からまだまだ検討を要するというで，技術的立場から十分つめないと行政面からはとり組めない。しかし最近千葉県では力を入れており，他でも積極的に取り組んでいることは承知している。これらの県と民間では，今までの成績から一部では技術面ですでに問題はないと言っている。しかし行政としてはそれが果して養豚家にとって大きなプラスか否かを考える必要がある。早まって実行し末端のミスリードでいろいろ相談を受けている。これに対し責任を感じざるを得ない。農林中金の融資を受けたいという所もあるが，改良課としては技術面でまだ問題があると思うので積極的に推賞していない。今はあくまで技術面の検討の段階である。このような会議を通じてさらに掘り下げた研究をして欲しい。外国でも育種の手段としてやっているが，改良課としても新しいものは取り入れて行くべきだと考える。

* 姫野：今後の問題として給与基準がある。

* 小山(千葉県養豚試)：結果的にSPF豚も格付率が問題になるから早急に給与基準を検討する。

* 姫野：管理基準の問題はどうか。

* 小山：種豚供給中核農場は規制するが，コマーシャルは規制からははずす。

* 柴田(家衛試)：改良課の言うSPF豚の十分なデータとか技術の確立とは具体的にどのようなものなのか。改良課の論法ではそのようなものは永久に出ない。結果的にはとり組むと言いつつ反対なのであろう。現在大方の人が畜産目的のSPF化をスタートする時期に来ていると考えている。もう少し合意を得るようにしたらどうか。

* 緒方(衛生課)：結果的にSPF豚については前進がみられている。TVでも紹介され，民間でも

かなり進んでいる。この段階で国ももう少し固まった姿勢が欲しい。

*河野(技術会議): 具体的にどのような姿勢か。

*緒方: 各県でも資料が出てきている。この際実用化についてどう考えるかが問われている“なお検討を要する”という段階ではない。

*菅野: 改良課に反論するわけではないが、飼料の値上げも恒常的になってきている。このようなきびしい状況下では革進的に考えるべきで、差し迫った現状の中で責任の所在をタライ廻しし、傍観者的に“完全な技術を待って”という改良課の考えは甘く現実的でない。具体的な提案ひとつ出すわけでもなく、実態の解決策を示さない上での反論はどうも納得できない。一体時代の流れを深刻に受けとめているのか。

*改良課: 反論ではないが、自信をもって農家に奨励する段階ではない。技術的にも流通的にも奨励できると判断された段階になれば行政的にとり上げる。しかし意思統一があれば足を引っばるようなことはしない。

*柴田: 歴史的にみて SPF 化に困難さがあったことは事実である。家畜衛試では実験動物としての SPF 豚として出発したから産業面という場合家畜衛試の域を脱する問題である。しかし、千葉県ではそれを実行してくれた。そして現在かなりデータが出揃っており、かつ畜試の立場もあるから何かそこに妥協的なものはないかを考えるべきである。

*松垣: SPF 化と清浄方式とについて各県とも相談した。そして現時点ではケースバイケースで行くべきだ(松垣氏は超早期離乳清浄化方式を畜試で行っている)。千葉県の飼養標準を押しつけるわけには行かない。しかし、この問題について

は農水省としてもだんだん具体化の方向に進むべきである。

*改良課: 意志統一してくれなければ迷いが多い。また失敗したときの波紋が大きいと思われるので慎重にやって欲しい。

*松垣: 清浄化と SPF 化との言葉づかいを整理したい。

*姫野: SPF 豚について、現時点の状況はどうなっているかと改良課に聞かれている。これについて各場所の協力を得て何らかの結論を出す必要があると思う。これは論理だけでなく、人間関係も大切に話し合いの場が大きな要素だと思う。

結局農水省を話し合いの場とする SPF 豚の協議はこれを最後に以後行われませんでした。つまり当時「官」の中軸では SPF 豚の実用化に関しては遂にこれを取りあげることなく、時代の要請を待たざるを得ませんでした。

そして民間は……

このように SPF 化は当初から「官主導型」をとることなく、否、「官」中軸の反対を押しきって「民間主導型」によって開始され、一部の県とも SPF 豚協会につながっていました。国からの補償がまったくないまま自己資金によるリスクを背負ってゴーサインを出した当時の民間の責任者に対して敬服せざるを得ません。それを支えるように私どもも畜産関連雑誌に SPF 豚に関する記事を精力的に投稿し、これの正しい理解の普及に努めました。一方、養豚家の中にも将来を見据えて SPF 豚に夢を抱くものが現われ、ここに真の意味の実用化の成績が示されるに至りました。昭和 55 年頃のこととその当時 SPF の稼働種豚は約 25,000 頭に達していました。

あとがき

人間誰しも保守的で、改革には抵抗があります。もともと畜産目的のSPF化を進めたいという理由はただひとつ、それはこんなにもいろいろの疾病がありながらそれを排除出来ないとなれば養豚家に申し訳ないということでした。もしこれを解決する手段があれば私どもは養豚の生産性向上のために役に立ちたいと思ったからです。こう考えてから30年がたちましたが、当時あたかもわが国の畜産産業が頂点を迎えていた頃でした。そして現在は畜産物自由化の波で日本の畜産産業は逆境に見舞われております。30年の重みをつくづく感じざるを得ません。すなわち高度な技術をもつものが生き残る時代です。豚のSPF化についてはすでに第二世代にはいっており、優秀な後継者が育ってきたことは大変心強いかぎりです。

いままで私は自分の立場からわが国畜産目的のSPF豚の歴史を管見してきました。しかし、協会、各県、各企業で最初からあるいは途中から参画して今日に至ったところでは、いわば各論としてそれぞれ膨大な歴史的資料がありましよう。すべてを包括すれば分厚い一冊の本ができて上がるでしょうが、最近の10年間も含めてこれに手を染めて頂きたいと念願しております。

文 献

Young, G. A. (1952), Annual Report of the Hormel Institute, 1952-52, 68-70. University of Minnesota.

Young, G. A. (1953a), Ibid., 1952-53, 68-70.

Young, G. A. (1953b), Ibid., 1952-53, 70-72.

Young, G. A. (1953c), Special Report to J. C. Hormel, March, 27, 1953.

Young, G. A. (1954a), Annual Report of the Hormel Institute 1953-54, 65-66, University of Minnesota.

Young, G. A. (1954b), Ibid., 1953-1954, 67-69.

Young, G. A. (1955), Proceedings Book of the American Veterinary Medical Association, 92nd Annual Meeting, Minneapolis, pp 377-381.

Young, G. A. (1960), J. A. V. M. A., 137, 561-562.

Young, G. A., and Underdahl, N. R. (1951), Archives of Biochem. and Biophysics. 32, 449-450.

Young, G. A. and Underdahl, N. R. (1953), Am. J. Vet. Res., 14, 571-574.

Young, G. A. and Underdahl, N. R. (1956), Am. Soc. of Farm Managers and Rural Appraisers, 20, 63-70.

Young, G. A., Zelle, M. R. and Lincoln, R. E. (1946), J. Inf. Dis., 79, 233-271.

Young, G. A., Underdahl, N. R. and Hinz, R. W. (1955), J. A. V. M. A., 16, 123-131.

Young, G. A., Underdahl, N. R., Sumption, L. J. Peo, E. R., Olsen, L. S., Kelley, G. W. Hudman, D. B., Caldwell, J. D. and Adams, C. H. (1959), J. A. V. M. A., 134, 491-496.

Young, G. A. (1964), Adv. Vet. Sci., 9, 61-112, Academic press. N. Y., Londond.

参考資料

SPF SWINE 総目次 1970~1981

Vol. 1 No. 1 (昭和45年6月1日発行)

近代多頭養豚における疾病排除の意義

……菅野 保

SPF豚研究推進の意義とその方向 ……波岡茂郎

米国のSPF豚状況 ……花岡秀昌

SPF豚農場における管理規制と飼育管理

……中島隆夫

<原著>

養豚用配合飼料の微生物汚染について

……赤池洋二ほか

SPF豚の肥育に関する研究 ……斎藤庸二郎ほか

豚用市販配合飼料の細菌叢について

……柏崎 守ほか

Vol. 1 No. 2 (昭和45年12月20日発行)

日本SPF豚協会へのメッセージ

……Norman R. Underdahl

各国のSPF豚概況 ……赤池洋二

多頭飼育に障害をあたえる豚の慢性疾病群について(1) ……藤原 弘

わが国におけるConventional豚の生産コストについて ……石川八郎ほか

埼玉SPF豚センターと今後の構想 ……笹崎竜雄

ネブラスカSPF豚集団変換計画10年のあゆみ

(訳) ……柏崎 守

<原著>

Primary SPF豚の作出および哺育成績

……波岡茂郎ほか

Primary SPF豚の飼育に関する研究

……土田昌友ほか

岡山県におけるSPF豚の概況(第1報)

……岡山県酪農試験場養豚部

<ノート>

埼玉SPF豚センターにおけるSPF豚飼育成績について ……小野真人

千葉県養豚試験場におけるPrimary SPF豚に関する生産計画およびPrimary SPF豚の生産状況について ……宮原 強

Secondary豚発育成績 ……岡田武彦

Vol. 2 No. 1 (昭和46年6月25日発行)

これからの企業養豚に思う ……本田英三

台湾における養豚技術の動向管見 ……波岡茂郎

多頭飼育に障害をあたえる豚の慢性疾病群について(2) ……藤原 弘

住商畜産SPF豚農場紹介 ……花岡秀昌

SPF検定法 ……波岡茂郎

<原著>

SPF豚の飼育給与に関する研究(予報)

I. 量的要因(飼育給与量)の検討

……斎藤庸二郎ほか

初生子豚の超早期離乳とPrimary SPF豚の里子方式による育成について ……赤池洋二ほか

<ノート>

埼玉SPF豚センターにおけるSPF豚飼育成績

……小野真人

Vol. 2 No. 2 (昭和46年12月20日発行)

畜産目的としてのSPF豚について ……猪 貴義

抗生物質の飼料添加と耐性菌について

……寺門誠致

<原著>

SPF豚の肥育とその経済性について

- ……赤池洋二ほか
 SPF豚の飼育試験および微生物検定について
 (第1報) ……三村二雄ほか
 清浄豚の作出およびその肥育試験について
 ……頭本昭夫ほか
 SPF豚の環境管理規制に関する研究(I)
 ……宮原 強ほか
 岡山県におけるSPF豚の概況(第2報)
 ……末長 護ほか
 HPCD子豚における豚プール乾燥血漿の投与
 について ……矢挽輝武ほか
 <付>
 第1回SPF豚研究発表会抄録 ……
 於：千葉県養豚試験場 昭和46年9月22日
- Vol. 3 No. 1 (昭和47年6月30日発行)
 欧米における豚病清浄化への動向 ……赤池洋二
 <原著>
 わが国の寒冷地養豚に関する調査
 ……赤池洋二ほか
 動物性飼料の細菌汚染について
 ……中 正則ほか
- Vol. 3 No. 2 (昭和47年12月20日発行)
 豚の急性循環障害(心不全) ……藤原 弘
 豚における肺炎の発生とその経済的影響につ
 いて ……Ronald G. Huhn
 <原著>
 SPF豚の飼育試験および微生物検定について
 (第2報) ……仲野博志ほか
 SPF豚の管理規制限界調査について(第1報)
 ……神原 啓ほか
 セカンダリーSPF豚の発育成績について
 ……石塚 勉ほか
 SPF豚の環境管理規制に関する研究(II)
 ……宮原 強ほか
 <レポート>
 SPF豚による畑作複合経営 ……小山昭二郎
 <付>
 SPF原種豚名簿
- Vol. 4 No. 1 (昭和48年6月20日発行)
 アメリカとカナダにSPF豚を訪ねて
 ……中 正則ほか
 <原著>
 SPF豚の飼養条件と性能について
 ……宮原 強
 農家養豚におけるSPF豚の成績 ……小山昭二郎
 SPF肥育豚の給与量の検討(I) 給与下限量
 の検討 ……斎藤庸二郎ほか
 SPF豚の肥育用飼料基準とくにTDNの検討
 ……石原 勉ほか
 岡山県における豚清浄化の諸問題
 ……森谷昇一
- Vol. 4 No. 2 (昭和48年12月20日発行)
 千葉県SPF豚実用化システムの概要および実
 用状況について ……宮原 強
 清浄豚の飼料給与量の設定およびと殺月齢が肉
 質に及ぼす影響について ……安東秀郎ほか
 一般農家におけるSPF豚の飼育の一例
 ……渡辺忠雄ほか
 全農飼畜中研におけるPrimary SPF豚の生産
 について ……中 正則
 住商飼料畜産丸森SPF豚農場紹介
 ……森沢寛明

<原 著>

SPF 肥育豚の給与量の検討 (II) 給与上限量
の検討 斎藤庸二郎ほか
愛媛県における清浄豚の作出について
..... 菊地仁司ほか

Vol. 5 No. 1 (昭和49年7月20日発行)

三重県における豚病清浄化へのみち
..... 亀山和夫ほか

<原 著>

SPF 豚の経済性に関する研究 ... 赤池洋二ほか
SPF 豚の飼育試験および微生物検定について
(第3報) 三百田聡視ほか
SPF 雄豚の一般環境への適応 ... 井本精一ほか

Vol. 5 No. 2 (昭和49年12月20日発行)

<原 著>

豚の帝王切開手術による Primary SPF 豚の生
産方法に関する研究 宮原 強ほか
愛媛県における清浄豚作出の予備調査と今後の
調査計画について 菊地仁司ほか
丸森農場における Secondary SPF 豚の中間成
績 佐々木 登ほか
横浜市内における清浄豚の現状について
..... 小菅 進ほか

Vol. 6 No. 1 (昭和50年6月30日発行)

SPF 豚年次報告 T. E. Socho et al.
肺の細菌清浄作用に及ぼす環境ストレスの影響
..... Stanley E. Curtis

SPF 豚の管理と施設の諸問題 ... 波岡茂郎ほか

<原 著>

ミートプラントで処理された SPF 豚について

..... 鈴木陽一ほか

豚 γ -globulin および豚プール乾燥血清による
Primary SPF 豚の哺育期における下痢予防
..... 矢挽輝武ほか

Vol. 6 No. 2 (昭和50年12月30日発行)

西独バーデン・ビュルテムベルグ州における S
PF 豚集団変換の諸問題 ... H. R. Gindele et al.
デンマークにおける SPF 豚生産について
..... 波岡茂郎

<原 著>

某農場における SPF 豚の実用化試験
..... 矢挽輝武ほか
SPF 肥育豚の給与量の検討 (III) 肥育後期の
一定給与 斎藤庸二郎ほか
SPF 肥育豚の給与量の検討 (IV) 肥育後期の
一定給与と前期不断給与の組み合わせ
..... 斎藤庸二郎ほか

Vol. 7 No. 1 (昭和51年6月30日発行)

先天性間代性筋痙攣症 M. W. Stromberg
過去10年間のスイスにおける SPF 豚生産につ
いて J. Staehli

<原 著>

SPF の人工感染実験例について
..... 芹川 慎ほか
SPF 豚の肥育試験について 工藤 寛ほか

<資 料>

日本における SPF 豚飼育状況 事務局

Vol. 7 No. 2 (昭和51年12月30日発行)

日本における豚疾病の現状とその対策について
の一考案 矢挽輝武

西友ファーム福島農場紹介 ……吉田武憲
〈原 著〉

Primary SPF 豚生産における飼育装置の改良
と哺育試験 ……秋山俊介ほか

Vol. 8 No. 1 (昭和52年6月30日発行)

〈原 著〉

SPF 豚の経済性について ……田中 誠ほか
一養豚場における SPF 豚飼養の概要

……首藤新一ほか

第二次 SPF 豚(清浄豚)の生産方式の検討と
その産肉性について ……菊地仁司ほか

Vol. 8 No. 2 (昭和53年12月30日発行)

〈原 著〉

Primary SPF 豚の里子哺育方式の検討

……宮原 強ほか

SPF および Conventional 豚農場由来大腸菌の
薬剤耐性 ……柏崎 守ほか

SPF 豚の一般環境への適応性 ……金沢勝昭ほか

〈総 説〉

SPF 豚の検定に関する現状および考えかた

……波岡茂郎

Vol. 9 No. 1 〈終刊号〉

(昭和56年6月1日発行)

〈原 著〉

SPF 豚の経営的評価に関する調査研究

……内田賢一

と畜検査における SPF 豚の衛生学的評価

……橋本邦夫ほか

農場飼育の SPF 豚に対する抗菌性——飼料添
加物の増体等に及ぼす影響……高橋 暹ほか

〈資 料〉

一般農家における SPF 豚の現状 ……花岡秀昌
愛媛県下における畜産目的 SPF 豚導入の歴史
と現状……城戸武夫

〈紹 介〉

スイスの SPF 豚取引組合と SPF プログラムに
おける役割 ……H. Keller (杉本千尋ほか訳)

デンマークにおける SPF 豚生産の概要

……波岡茂郎

〈報 告〉

日本 SPF 豚協会 55 年度総会議事録

……事務局